

〈研究ノート〉

日米大学の中国語教育について¹⁾

郭 春 貴

(受付 1999年10月12日)

0.

中国が改革開放政策を実施して以来、世界の多くの国々で中国語を勉強する人口が日に日に増えてきた。そして、どの国においても中国語教育に関心が高まっている。日本の中国語教育にも改善すべきではなかろうかと思うことが多々ある。昨年、大学から在外研究の機会をいただき、日本と同じく中国語を外国語として教育している語学教育の先進国アメリカにて研究調査を行った。

無論、アメリカと日本は文化背景が違い、学生の中国語を勉強する特徴も異なるが、外国語教育の観点から、学ぶべき点も多いことを期待した。東アジア研究において著名なスタンフォード大学 (Stanford University) で一年間研究調査を行った。短い期間でもあり、全米の大学の中国語教育を把握するのは不可能であるが、できる限り、資料の閲読、授業参観、アンケート調査、教師と学生に対するインタビューなどを行った。幸い最後の3月(1学期)には直接教えるチャンスを与えられ、実際の経験も得た。そうした研究結果と教育の経験をまとめて、日本の大学の中国語教育と比較しながら、日本における中国語教育の改善策を考えてみたい。

1) 本文の主な内容は今年8月9日ドイツのハノーバーで開かれた第6回世界中国語教学討論会において中国語で発表したものを、日本語に書き直したものである。日本の大学における中国語教育の提言は未発表である。

1. 日米の大学における中国語教育の類型

1. 1

日本の大学における中国語教育の類型は3種類に分けられる。

- ①外大の中国語学科：外国語大学にある中国語学科で行う専門的な中国語教育である。基礎から専門までの4年間のカリキュラムで、毎日中国語の授業がある。
- ②総合大学の中国言語文学学科：総合大学にある中国言語文学、あるいは中国言語文化学科で行う中国語教育である。外大と異なり、専門的な語学教育ではなく、幅広く言語文化の授業を設け、学生に語学だけではなく、中国の文学や文化などの専門科目の授業も提供している。大学によって、多少違うが、一般には1年次のカリキュラムでは基礎の中国語授業は週4回あり、2年次以後は自分の専門によって語学の授業は選択履修となる。
- ③総合大学の一般語学教育：総合大学の一般教育²⁾に含まれる外国語教育である。多くの大学は英語が第1外国語として必修で、中国語・ドイツ語・フランス語などが第2外国語として選択必修である。第2外国語の中国語教育は他の外国語と同じく卒業に必要な単位はわずか4単位で、週2回90分の授業で1年で終わる。この一般教育の第2外国語の中国語教育は、クラスの学生数は5, 60人以上がほとんどであり、語学の学習と訓練というには程遠いものであり、語学というよりも文化教養の教育である。

1. 2

アメリカの大学は日本と異なり、文部省にあたる連邦教育局は各学校を直接管理したり干渉しない。各州の教育局が直接大学の予算を管理しているが、カリキュラムなどの自主権は各大学が持っている。そのため、州に

2) 一般教育の名称は大学によって異なり、大学の大綱化以来も、その名称はいろいろ変ったが、本文はやはりなじみがある一般教育で論じる。

よって、また大学によって、さまざまな特色があるカリキュラム・プログラムが実施されている。中国語教育のカリキュラムもかなりバラエティに富んでいる。だが、アメリカには日本のような外国語大学がないので、専門の中国語教育は行われぬ。また、日本の大学のように第1と第2外国語を区別しないので、第2外国語の中国語教育もない。とにかく、アメリカの大学では英語以外の言語はみな平等に扱われ、設ける外国語はすべて同じカリキュラムを学生に提供する。

中国語は外国語として、言語学科 (Dept. of Modern and classical Languages) あるいは外国語学科 (Dept. of Foreign Languages)・アジア言語文学学科 (Dept. of Asian Languages and Literatures)・アジア研究学科 (Dept. of Asian Studies)・東アジア言語文化学科 (Dept. of East Asian Languages) などに属している。どの学科に属しても、中国語教育の類型は他の外国語と同じく一つで、実用的な教育課程である。52%のアメリカの大学で卒業までに1つの外国語を必修としている³⁾。高校で一定の単位を履修したら、必修が免除される。必修外国語の授業は毎日50分の授業で1年で終わる。しかし、ほとんどの大学にはその上の中級、上級のコースも設けられている。外国語が必修でない大学でも中国語を含め、いろいろな外国語のカリキュラムが設けられている。近年、中国の改革開放政策によって、中国語を設ける大学が増えてきて、履修する学生も年々増加している。

1. 3

日本の大学における中国語教育類型では、第3類の学生が一番多い。第1, 2類の学生は少ない。外大の数は少ないので、学生も少ない。総合大学の例として広島大学を見ると、毎年中国文学言語学科の学生は10~15名であるのに対して、全学で中国語を第2外国語として履修する学生は約千人である。アメリカの主な大学では毎年中国語を履修する学生は約200~

3) 「世界25か国の外国語教育」 p 123-128

300人だそうである⁴⁾。本文では日米の大学における専門ではない、つまり一般教育としての中国語教育の目的・カリキュラム・教員・学生・教材などについて比較しながら、日本の大学に取り入れることができる点を考えたい。

2. 日米の大学における中国語教育の比較

2. 1 目的

日本の大学における第2外国語（以下2外と略する）の中国語はあくまでも一般教養の授業であり、1クラスの学生数は5, 60人以上で、目的は語学の訓練ではなく、教養を高めることと知識の教授に重点を置いている。とは言っても、ほとんどの大学はその一般教育としての2外の目的がどのようなものであるかについては不明瞭であり、それぞれの大学、教員によって差が大きい。

アメリカの大学における中国語教育は明確な外国語教育であり、1クラスの学生数は20人前後で、目的は実用的な語学知識の教授だけではなく、応用能力の訓練にも重点がおかれている。

2. 2 カリキュラム

日本の大学はほとんど Semester 制で、前期（15週）後期（15週）で1年の授業を行う。2外の中国語は大学によって必修単位が違うが、ほとんどは4単位である⁵⁾。また、その語学の単位計算は他の科目と異なり、他の科目は半期で2単位だが、外国語は僅か1単位で、通年の授業は他の科目は4単位だが外国語は僅か2単位である。従って4単位の必修2外中国語の授業を1年で終わろうとするなら、週2回90分の授業を行わなければな

4) 筆者のアンケートによる。Stanford University (約300) Harvard University (約300) Princeton University (約200) California University (Berkeley校) (約300) California University (Davis) (約200) など

5) 大学によって2外の必修単位数が異なる。2単位（広島経済大学など）もあれば、8単位（明治学院大学など）もある。大部分の大学は4単位である。

らない。この2外中国語の授業は一般教養が目的なので、初級の授業だが、クラスの学生数も多いので、訓練は難しい。週2回の授業内容も大学によらずいぶん異なる。多くの大学は形の上で文法と聴解などと分けられているが、それだけの授業では学生の興味が引き起こせないで、実際は分けない傾向が強い。また、多くの大学では必修授業の他に週1回か2回の中級クラスを設けているが、履修生が少なく、10人前後である。

アメリカの大学はセメスター制もあれば、クォーター制 (Quarter) (4学期) もある。外国語のカリキュラムは初級と中級の場合は1年間毎日50分の授業である。1年間の必修を要求する大学でも初級授業の他に、毎日の中級、週3回の上級のカリキュラムを設けているところが多い。一部の大学では正規の語学授業 (初級, 中級, 上級) 以外に中国書道・会話・講読・ビジネス中国語などのカリキュラムが組まれている。

2. 3 教員

日本の大学で中国語を教える教員には専任と非常勤がある。専任教員は大部分が中国語あるいは中国文学専門の日本人であるが、実際には語学より文学専門の教員がはるかに多いというのが現状である。非常勤講師は臨時教員であり、他大学の専任教員もいれば、フリーの教員もいる。週に2, 3コマの授業を担当するだけで、授業が終わるとすぐ帰り、授業外の指導はほとんどできない。最近、来日中国人が増えたので、大学の非常勤中国語講師もそのような中国人講師が増えてきている。

アメリカの大学の語学教員は日本のような非常勤講師がなく、全部専任の講師である。専任教員は終身雇用の教授 (tenure track) と終身ではなく契約による任期制の語学講師 (language instructor) の2種類ある。中国語教員の専任教員はほとんどがネイティブの中国人だが、契約語学講師は全てネイティブの中国人である。tenure track は、何年間かの契約の後に終身教授の認定が審査で決められる。終身の教授は主に専門科目の担当とカリキュラムの編成・授業のコーディネーターの仕事を担当し、実際の語学

授業はほとんど契約の語学講師が担当する。契約の語学講師は専ら授業に関する仕事をする。授業以外も学生指導の office hour を設けなければならない。語学の教員は契約制であり、また、学生による評価が教員の昇進と契約の継続に影響するため、教員の情熱は高く、責任感が強い。

日米の語学教員を比較すると、次の4つの相違点がある。

- ①日本の大学の専任教員は全員終身制で、非常勤講師も一旦採用されたら、審査がなく、終身で非常勤でいることができ、学生の授業評価も何も影響力がない。そのために、アメリカ大学の教員と比べたらプレッシャーがあまりないので、授業に取り組む姿勢が甘いと言わざるをえない。
- ②日米大学の双方とも基本的に同じく学問を重視して、語学を軽視する傾向があるが、アメリカの大学は近年来その傾向を直してきて、授業の単位数が他の科目と同じことは言うまでも無く、大学が語学授業に投入する予算も多くなってきている。クラスの学生数が少ないため、当然教員の数が増えるためである。それに対して、日本の大学は語学の単位数は他の科目より少ない。語学教育の予算も少ないため、教員が専任の語学教員ではとても足りない。ほとんどの大学で70%の外国語授業を非常勤講師に頼っている⁶⁾。授業外の指導や補習はほとんどできない。
- ③アメリカの大学では研究業績はもちろん、教学に対する評価も重要視される。それに対して、日本の大学は研究業績は重視するが、教学はあまり重視しない傾向がある。教学がよくても悪くても昇進に何の影響もない。語学の授業は教員の教え方が特に肝要であるのに、日本の大学教員は残念ながら、現実に追われて教学より研究に力を入れている。
- ④アメリカの大学の中国語講師は大部分がネイティブの中国人（アメリ

6) 広島修道大学の中国語授業は69%、広島大学は75%、広島経済大学は80%、広島工業大学は100%が非常勤講師に頼っている。

郭：日米大学の中国語教育について

カ生まれの華僑、大陸、台湾、香港出身の中国人) であるが、日本の大学の中国語教員は大部分が日本人である。

2. 4 授業内容

日本の大学における2外中国語教育は週2コマの90分授業で、年間60コマ(前期15×2, 後期15×2)行われる。アメリカの大学の中国語授業は週5コマの50分授業で、年間150コマ(前期15×5, 後期15×5)行われる。実際、アメリカの中国語授業の時間は日本より週70分多い。しかもクラスの学生数が少ない。そのために教員の数も当然増やさなければならない。大学の語学教育重視が窺われる。

上に述べたように、日本の2外中国語教育はクラスの学生数が多いので、語学力の訓練よりも教養知識を高めることになる。1年間週2回(大体2人の教員が担当する)の授業でどんな目標を達成すべきかという指導要領もない。実用的な会話よりも講読翻訳や文法を重視する授業が多い。

アメリカの大学における中国語教育も指導要領がないが、実用という目的がはっきりしている。少人数のクラスで、ネイティブの教員(1人で5回の授業を担当することもあれば、3人で5回の授業を担当することもある)により徹底的に会話力の訓練をする。漢字のハンディキャップがあるにもかかわらず、週5回50分の授業で、1年で日常会話がほとんどできることに感心した。

正直に言うと、日本人の学生は漢字がわかるので、講読や翻訳よりももっと実際の語学の応用力を訓練した方がよいのではないかと思う。実際にアメリカの学生は漢字のハンディキャップがあり、週に僅か70分間だけ多い授業で、1年間の学習で中国人との日常会話が十分できることは日本の大学における中国語教育が反省すべき点ではないかと思う。

2. 5 学生

全国の事務系大学生の2外選択状況調査によると、中国語第一希望者が

1995年から4年連続で第1位を占めている(95年37.6%, 96年42.1%, 97年45.1%, 98年39.8%)⁷⁾。また、最終受講者数も中国語の履修者が4年連続で第1位を占めている(95年33.2%, 96年37.9%, 97年40.5%, 98年38.3%の約69,000人⁸⁾)。この数字を見ると、日本の大学で中国語を勉強する人口は英語に次いで、かなり多いと言えるだろう。しかし、残念ながら、上に述べたカリキュラムや教員の問題によって、大勢の中国語の履修者を失望させていないだろうか心配である。

一方、学生側の方はいかがだろうか。毎年35%以上の大学生が2外として中国語を履修しているが、この学生達の勉強する動機・意欲・姿勢などはどうだろうか。残念ながら、これは最近よく言われる学力低下と同じく芳しくない。

アメリカの大学においても中国語履修生が最近年々増えてきた。アメリカの Chinese Language Teachers Association, Inc. の調査報告によると、93年は9,124人、94年13,923人、95年16,815人だそうである⁹⁾。最近中国系の学生が増えているが、これらの学生は中国の家庭に生まれ育ったにもかかわらず、中国の方言はできるが標準語の普通語があまりできないものが多い。全体の履修生の中には、選択必修もいれば、必修ではない学生も含まれる。しかし、中国語の漢字はアメリカの学生にとって、大変難しいものである。大部分の学生は横文字のスペイン語・フランス語・ドイツ語・イタリア語を選ぶ。敢えて中国語を選ぶ学生は相当興味を持ち、動機がはっきりしている。学生達の動機・意欲・姿勢などが前向きであるというのが筆者の観察である。

アメリカの中国語履修生と比べたら、日本人の学生の問題点は次の4点が考えられる。

- 7) 平成10年12月「全国事務系大学生・非英語外国語(第2外国語)選択調査結果報告書」
- 8) 同7)
- 9) Chinese Language Teachers Association, INC 「United States Four Year Colleges Chinese Language Classes Envolment Survey」 1998, 1999

- ①アメリカの学生が中国語を履修する動機は非常にはっきりしている。主に「中国の文化に興味がある」「中国と商売したい」「中国で何か仕事をしたい」という動機である。一方、日本人の履修生に対して、筆者は毎年新学期に質問するが、「中国語は漢字があるから」「中国語は単位を取りやすいから」「横文字に弱いから」「他の2外に興味がない」「よくわからない」などと答えた学生が多い。学生が2外の中国語を勉強する動機はあまり明確とはいえない。
- ②アメリカの学生は勉強する動機がはっきりしているので、授業に取り組む姿勢はとにかくまじめで、積極的である。よく発言し、質問する。日本人学生の学習姿勢は、日本の文化に関係があるとよく言われる。「沈黙は美德」という考えで、授業ではあまり発言しない傾向が強い。語学の授業は大きい声での朗読や会話練習などが大切なのに、日本人学生は一般的に恥ずかしがりで、あまり発言しないし、しても声が小さい。
- ③アメリカの社会は大学の成績を大変重視し、就職する際においても然りである。そのため学生の在学中の勉強態度は申し分がない。とにかくよい成績を取るためにまじめに努力する。大学側も毎年一定の単位を収めない学生には退学させるという厳しい規定を設けているところが多い。それ故、学生の授業態度はまじめであり、勉強する意欲も高い。それに対して、日本の社会は学生の大学の成績をそれほど重視しない。就職も成績よりも人格や態度の方を重要視する。そのためか、多くの学生が大学であまり勉強しないし、授業に取り組む態度も元気がない。ましてや専門でもない2外の授業に対してはさらにやる気がない。

2. 6 教材

日本の大学における2外の教育目標は曖昧で、語学か教養か、大学によって、教員によってかなり違う。そのため、使用する教材も千差万別である。

中国で出版した教材は内容が多すぎて、日本の社会に合わないものが多いので、ほとんど使えない。結局、担当教員の自家製の教材が多く、どれが代表的な教材かは言えない。

アメリカの大学における中国語教育は目標が明確で、実用的な語学力を養うことである。しかも毎日授業があるので、授業との関連性があり、かなり大型のテキストが要求される。もちろん、大学によって使用する教材は異なるが、筆者の調査結果では多くの大学が次の3つの教材を使っている。

- ①『Practical Chinese Reader 实用汉语读本』北京語言学院編 1981
- ②『Integrated Chinese 中文听说读写』Tao-chung Yao and Yuehua Liu 編著 Chen & Tsui Company 1997
- ③『Chinese Primer 中文入門』Ta-Tuan Chen, Perry Link 編著 Princeton University Press 1994

2. 7 授業形式

日本の大学における2外の中国語の授業ではほとんど1人の教員が50人以上の学生(70人80人もある)を教える。一般的には日本人の教師の場合にはまず、教師がテキストを読んで、学生に日本語に訳させ、その後にテキストの例文を日本語で説明し、練習問題をやらせてもう終わりである。中国人の教師の場合は、まず、教師がテキストを読んで、全員がついて読む。教師によっては、何人かの学生に読ませることもある。そして、日本語で本文と例文を説明して、練習問題をやるだけで授業が終わる。とにかく、学生数が多いので、全員に読ませて、会話を練習させる時間はないと多くの教師は考えている。週2回授業の場合は2人の教師が担当する大学が多い。2人の教師は別々に異なるテキストを使って教えることもあれば、互いに協力し合って連繋のある授業を行うこともある。

アメリカの大学における中国語の授業形式は実に多様で、興味深い。各大学のカリキュラムが異なるので、授業形式もさまざまである。基本的に

郭：日米大学の中国語教育について

1年の基礎コースは1クラスの人数が20人前後、1コースは履修学生の人
数によって何クラスも設けられる。1クラスの担当の教師は1人のときも
あれば、3人のときもある。教師が1人のクラスなら、月曜日から金曜日
まで毎日の授業に関連性があり、学生の進度も把握できる。学生の成績は
教師の責任にかかってくる。2人か3人の授業ではそれぞれの教師が分担
して、発音・会話・作文・聞き取りなどの授業を行う。勿論、契約の教師
なので、毎日大学におり、授業の連絡も難しくない。授業は小教室で、学
生が大きいデスクを囲んで授業を受けることもあり、また自由に教師の周
りに座ることもある。基礎コースの授業は入門なので、最初の2週間は英
語の説明があるが、それ以後はほとんど中国語で説明と練習をする。教師
によって、たまに英語で語句の説明があるが、教室用語や練習などはほと
んど中国語で行う。中級以上のクラスはすべて中国語で行う。学生の聞き
取りの力は基礎コースから鍛えられるのである。毎日の授業では教師の説
明後に、必ずペアを組んでテキストの読みか会話の練習を行う。授業外に
も週1回教師の研究室で1人1人会話の練習をする。

中でもプリンストン大学 (Princeton University) の授業は特色があるの
で、ここで紹介したいと思う。中国語授業は週5回の授業を小、中、大ク
ラスに分けて行なう。大クラスは25人くらいで、教師が英語でテキストの
内容、文法などを説明し、質問を受ける。3回の中クラスは8人の学生に
専ら中国語の読み、会話などの訓練を行ない、英語は一切使わない。1回
の小クラスは1対1で教師の研究室で練習や質問などの授業を行う (1人
は約10分)。

3. 日米の学生に対する中国語教育の相違点

日米文化の違いによって、学生が中国語を勉強する方法が当然異なるの
は言うまでもない。そのために、両者に対する教学方法も無論異なってく
る。筆者の1年間の考察と実際の教学経験から主に次の4点が上げられる。

3. 1 漢字の教育

日本人の学生は小学生からすでに漢字を習得しているのです。中国語を習うときに一番有利なのが漢字である。日本人学生に中国語を教えるときには、漢字の書き方などを説明する必要がない。せいぜい中国語の簡体字と繁体字の違い、日本の漢字との違いの説明だけである。しかし、アメリカの学生に漢字を教えるのは大変骨が折れる。多くの学生は中国語が好きだが、漢字に恐怖感がある。そのために、一部の大学では最初の3ヶ月の授業では漢字を一切使わず、中国語のローマ字(拼音)だけを使って会話を教える。また、中国語の授業で漢字だけを教えると時間がかかるし、学生も退屈してしまうので、授業中ではなかなかたくさんの漢字を教えられない。多くの学生は話せるが漢字が書けない。漢字を覚えないと、文章の読解は全くお手上げである。また、アメリカの大学における中国語授業で教える漢字は繁体字と簡体字両方である。ほとんどの大学では基礎コースで繁体字を先に教えて、中級になると始めて簡体字を教える。テキストには必ず繁体字と簡体字が記述してある。

3. 2 発音の教育

中国語の発音を学習するに当たっても、日本の学生は漢字のために有利だと思われがちである。しかし実際、日本人が中国語を習う時に、漢字は便利な一方、邪魔物になることもある。つまり、中国語の漢字を発音する時に、どうしても日本語の漢字の読みで発音してしまい、正しく読めない傾向がある。それは中国人が日本語を習う時にもいえることである。その点ではアメリカ人の学生は漢字の邪魔がないので、純粋な中国語の発音を真似ればよいのである。しかしだからといって、アメリカ人が中国語の発音を習うときに日本人より有利であるとは言えない。というのは、中国語の漢字には、発音が日本語に似ているものもあるからである。例えば「来 lái」「新 xīn」「看 kàn」「利 lì」などは日本語の発音に近いので、学生は覚えやすい。結局、日米の学生が中国語の発音を習うときには、それぞれ母語

の音韻体系が異なり、利点も不利な点もあるのであるから、教学上で考えなければならないと思われる。

3. 2. 1 声調の教え方：

まず、双方にとって最も難しい声調について考えたい。日米の言語は共に声調がないので、双方の学生ともこの点において、たいぶ悩まされる。それぞれの母国語の特徴によって、中国語の声調の習得に困難な点も異なってくる。例えば日本人の学生は1声と3声（半3声も含む）がマスターしにくい。しかも1声と4声、2声と3声の区別がつかない。アメリカ人の学生は2声と3声がマスターしにくい。そして1声と3声、3声と4声の区別が難しい。従って、それぞれの学生に対する声調の教え方も当然異なる。

3. 2. 2 母音の教え方：

日本語の母音が5つしかないのに対して、中国語は単母音が10個（i, ɿ, ʅ, u, ü, a, o, e, ê, er,）もある。特にü, e, er, と「zhi, chi, shi, ri, zi, ci, si」の[i]は[ʅ], [ɿ], この5つの母音がマスターしにくいので、重点的に訓練しなければならない。また、鼻音韻尾の[ŋ]と[n]の区別も要注意である。

英語の母音は8つ（i, e, œ, ê, a, u, o, ɔ）あり、中国語の母音と対応させるのにそれほど難しくはない。[ŋ]と[n]の区別も大丈夫である。ただ「zhi, chi, shi, ri, zi, ci, si,」の[i]の発音に気をつければよい。

3. 2. 3 子音の教え方：

中国語は日本語にない子音の、有気音（p, t, k, q, ch, c,）と無気音（b, d, g, j, zh, z,）, 巻き舌音と巻き舌でない音の区別が困難である。これを日本人の学生に教える時には、工夫が必要である。アメリカ人の学生にとって巻き舌音は問題がないが、有気音と無気音の区別は、特に「j, q, z, c,」の発音が英語と違うので、注意しなければならない。

3. 2. 4 リズムの教え方：

英語、日本語と中国語はそれぞれのリズムがあり、「読む」と「話す」のリズムが違うのはいうまでもない。しかし、英語は中国語のリズムに近く、

抑揚があり、アメリカの学生はなじみやすい。しかし、日本語のリズムは割と平坦で抑揚がなく、中国語とかなり違うので学生は慣れるのに時間がかかる。アメリカ人の学生に対してはリズムを特別に教えなくても、「読む」と「話す」の訓練をするうちに慣れてくるが、日本人の学生に対しては、注意して教えないと、中国語の抑揚やリズムがうまく身につかず、日本語のような中国語になってしまう恐れがある。

3. 3 文法の教育

英語と日本語の文法は中国語の文法とそれぞれ異なるので、日米の学生に教える時の順序や重点がかなり違う。この場ですべてを言うことはできないが、次の6点の違いを見ると、双方の学生に対する教え方・順序・重点を別々に考えるべきだと思われる。

- ①英語と中国語は人称代名詞をよく使うが、日本語はあまり使わないので、日本人の学生に人称代名詞の使い方を指導しなければならない。例えば日本語は「兄がきたか?」「お兄さんが来ましたか?」のように人称代名詞を使わないので、学生はよく“哥哥来了吗?”と訳してしまう。中国語は代名詞がないと、一体誰のお兄さんかわからないのである。英語なら My brother, His brother, Her brother という言い方があるので、学生はそのような誤りを起こさない。
- ②英語と中国語には複数の指示代名詞がある (这些 These, 那些 Those)。日本語にも「これら、あれら」があるが、実生活ではあまり使わない。例えば「これらのお茶は中国のお茶です。」と言わない。そのため学生は中国語で複数の指示代名詞がうまく使えないことが多い。教員はその点について指摘しながら、多く練習させるべきだと思う。
- ③英語と中国語の目的語は普通動詞の後に置くが、日本語はその前に置く。日本人の学生に対して、この「S + V + O」という形を強調すべきだが、アメリカ人の学生にはそのような指摘する必要はないと思う。例えば日本人の学生は時々「今日は時間がある。」を“今天我时间有。”と言って

しまう。

- ④日本語と中国語は量詞があるが英語にはそれほどないので、アメリカ人の学生には“一本書”（一冊の本）“一枝筆”（一本の筆）“一件衣服”（一枚の服）のようないろいろな量詞の使い方を教えなければならない。日中の量詞は多少は異なるが感覚としては理解しやすいので、重点にはならないであろう。
- ⑤日本語と中国語の時間詞と場所詞の使い方はほぼ同じだが、英語はかなり違うので、アメリカ人の学生には時間詞と場所詞を重点的に教えなければならないと思われる。日本人の学生は英語に影響されないように注意すればよいと思う。
- ⑥日本語と中国語に受事主語はあるが、英語にはないので、“牛奶我喝了。”（牛乳を飲んだ）のような文はアメリカ人の学生には多くの練習が必要と思われる。

以上述べた日米中言語の文法の違いはほんのわずかではあるが、日米の学生はそれぞれ必ず多少なりとも自分の母語の影響をうけているので、中国語の文法を教えるときはやはりそれぞれに対応した方法が必要と思われる。

4. 日本の大学における中国語教育への提言

日本の大学における中国語教育は外大と専門学科は別として、全国の大学で毎年40%近い学生に選ばれた2外の中国語であるが、その教育は残念ながら、今のところまだ多くの問題点が残されているように思われる。21世紀という国際化時代を迎えるときに、英語教育はもちろん、第2外国語の教育も考え直さなければならないのではないか。実際、今の時代は英語だけで国際化とは言いにくくなった。アメリカの外国語教育の重視を考えると、アジアの国々は英語以外の言語も勉強しなければならないのではないか。そして、日本にとって考えられる大切な第2外国語はもちろん中国語である。これは、この何年間か日本全国の大学の40%近い学生が第2外

国語として中国語を選んだことからもしっかりしている。大学の指導者も中国語の教員もみなその自覚を持たなければならないと思う。以下は筆者が13年間大学で中国語を教えた経験と今回のアメリカの大学の中国語教育についての研究調査を踏まえて考えた改善策であり、間違いも多々あると思うが、中国語のことわざ“抛砖引玉”(レンガを投げて玉を引く……他の高見のきっかけとする)というのが願いである。

- ①大学側は2外の大切さを認識し、至急最善策を考えて、時代と学生のニーズに応じるカリキュラムを組んで、単位数も他の科目と同じにする。語学教員の担当コマ数も他の教員の担当コマ数と同じにする。そして、必要な中国語教員を採用する(非常勤ばかりに頼る語学教育はもう時代に相応しくない)。
- ②現在、全国の大学における中国語教育の指導要領がないが、全国中国語教育協議会はこの問題について検討中であり、高校の中国語教育ではすでに指導のめやすが出ているので、専任の中国語教員がそれを参考にしながら、自分の大学の学生に合う指導内容と目標を設定すべきである。
- ③一般教養という目的よりも実用的な目的に重点に置くべきである。語学教育を通して、文化教養の目的も達成できる。現在の週2回90分の授業を変えて、毎日50分か45分の授業を行う。クラスの学生数は20人は無理としても、30人前後にすれば語学教育の効果は必ず上がる。
- ④少人数かつ毎日授業を行うために、教員の数は当然増やさなければならない。全員が専任というのは非現実的であるが、半分以上の授業を非常勤に任せると良い教育効果が期待できない。せめて契約教員を採用して、専任と契約教員が80%以上の授業を担当すべきである。
- ⑤非常勤に頼らざるを得ない場合は、専任の中国語教員が必ず指導要領と目標を非常勤教員に(契約教員にも)伝える。教学内容、教育方法などについて会議を召集して互いに検討する。
- ⑥語学教員を含めて、全ての教員を任期制にすることは無理な話として

も、公平かつ効果的な評価制度は導入すべきであると考え。研究業績はもちろん大切だが、教育の質を評価するために学生の評価も欠かせない。親方日の丸のやり方は大学にとっても、学生にとっても大きな損失となるであろう。そのようなやり方はもう時代遅れではないか。日本の企業もすでに終身雇用制度を見直して、いろいろ改革を進めていることを大学も考えなければならない。国の将来は教育にあり、教育の柱は教員である。厳格な制度を採るために、高い評価システム、いわゆる高い給料システムがなければ優秀な人材は集まらない。

以上述べた提言はあくまでも筆者個人の未熟な考えである。無論、中国語教育だけの改革がなかなか無理な話は百も承知である。大きく考えると、日本の教育制度にも、大学の体制にも関わる問題であると思う。文部省は直接干渉できないかもしれないが、21世紀の国際化時代を迎える今、第2外国語教育の重要性を各大学に伝えるべきではないか。時代に応じるだけでなく、毎年40%近い学生のニーズにも応じなければならないと思う。毎年40%の学生が第2外国語で中国語を勉強していることは、将来日本と中国とのいろいろな方面の交流を考えると、なんと頼もしいことではないか。反面、それは大学と中国語教育者が負う責任が重いということである。

99. 10. 12

参考文献：

- ①Wilga M.Rivers編著 上地安貞等訳1992「変革期の大学外国語教育」桐原書店
- ②Peter Dickson and Alister Cumming 編著1999「世界25カ国の外国語教育」
「英語教育別冊」大修館書店
- ③株式会社毎日コミュニケーションズ 教育広報事業部・企画調査課1998「全国事務系大学生・非英語外国語（第2外国語）選択状況調査 結果報告書」
- ④Madeline Chu 1999「United States Four-Year Colleges Chinese Language Classes Enrollment Survey」Chinese Language Teachers Association,Inc,USA
- ⑤Wang, C.Y. 1989「Research on Teaching Chinese in 45 Universities: Analysis of Survey Results」『Journal of the Chinese Language Teachers Association』Vol.34

No:3

- ⑥長谷川良一1990「日本学生学习汉语语音上的几个问题」『第三届国际汉语教学讨论会论文选』 p. 219-224
- ⑦奥水優1995「日本学生学汉语语法」『第四届国际汉语教学讨论会论文选』 p. 414-416
- ⑧杜君燕1995「对日本学生进行汉语教学的几个问题」『第四届国际汉语教学讨论会论文选』 p. 177-182
- ⑨邱质扑1983「美国汉语教学的一些情况和问题」『对外汉语教学论文选』 中国教育学会对外汉语教学研究会 p. 310-322
- ⑩理查德.T. 汤姆逊 1980「美国汉语教学综述」『语言教学与研究』 4期 北京语言学院出版社 p. 12-20
- ⑪黎天睦Timothy Light 1980「美国的语言教学法——兼谈汉语教学」『语言教学与研究』 4期 北京语言学院出版社 p. 157-165
- ⑫冯丽萍1997「初级汉语水平英日语学生语音误区的分布与比较」『第五届国际汉语教学讨论会论文选』 北京语言学院出版社 p. 601-610

日美大学汉语教育的比较

郭 春 贵

随着中国实行改革开放政策后，世界上许多国家学习汉语的人口日益增加。美国和日本也不例外。特别是两国的大学学习汉语的大学生可以说是全世界第一第二的。日本大学学习汉语教育的类型有3种：外大汉语专业的汉语教育、综合大学的中文系的汉语教育和第2外语的汉语教育。美国大学没有专门的外语大学，也不分第1第2外语，英语以外的语言都是外语，所有外语教育只有一种，不论专业不专业，谁都可以学习。因为日本学习汉语最多的以选修汉语为第二外语的人居多，故本文主要针对日本的第2外语的汉语教育跟美国的汉语教育情况作一比较，从而探讨日本汉语教育应该改善的地方。

1. 日本大学的第2外语汉语课(以下简称2外汉语课)是选择必修课，学生必须从德语、法语、汉语等外语中选修一门外语。近40%的日本大学生选修汉语。这种2外汉语课的主要目的是一般教养，提高知识。美国大学的汉语课(简称美国汉语课)虽也是公共外语课，但却是属于专业课里的一部分，非专业的学生也一块儿学习，但只须学习所要求的学分，获得学分后可以自由选择继续学习与否。美国汉语课跟其他外语课一样，都是重视交际能力的训练。

2. 日本2外汉语课的课程基本上是必修4学分，一年60节90分钟课，每周2节。前后期各30节。修完后大部分的学生都不继续学习。美国汉语课也是必修4学分，一年150节50分钟课，每周5节课，前后期各75节课。修完后大部分的学生都继续学习下去。

3. 日本2外汉语课的班级人数大约5、60人以上(有些甚至100多人)，甚难进行朗读会话练习，上课内容着重讲解和翻译。美国汉语课班级人数约20人，适合语言教学，上课内容着重会话练习。

4. 日本汉语教师大部分为日本人，难进行实际语言训练，大部分着重讲

解与翻译。美国汉语教师多为中国人，能进行实际语言训练。另外日本大学重研究轻教学，重学术轻语言，造成大部分的教师不重视语言教学，所以教学质量差强人意。美国大学虽也重学术轻教学但还较重视外语，特别美国教师没有日本的终身制，都是契约制，因此教师们为了生活都得拼命把课上好。整个汉语教学质量远比日本高。

5. 日本大学选修2外汉语课的学生学习动机不强，学习意识也不高，加上社会上不十分重视大学成绩，造成学生上课态度松散不积极。美国学生选修汉语的动机强，学习意识也高，社会对学生的成绩非常重视，所以学生都很努力学习，上课态度也很认真积极。

最后本文对日本大学汉语教育提出一些个人肤浅的建议：

1. 大学方面必须及时了解时代和学生的要求，认识第2外语，特别是汉语的重要性，从而改善目前轻视第2外语的教育方针。
2. 大学汉语教学目的必须改为交际运用能力的训练。语言训练的同时也能提高教养和知识。
3. 不只语言教师，所有大学教师，包括非专任教师都必须采用任期制，同时提高教师工资。对所有教师采取公平合理的评价标准。这样才能保证教师队伍质量的提高。
4. 教师队伍要加强，不能太过依赖非专任教师，除了增加专任教师以外，可以聘请契约教师来加强教学工作。
5. 汉语课班级人数不宜多·以30人以下为佳。
6. 汉语教师在没有指导要领之下，应该自己制定适合该大学的汉语指导要领和目标。

以上几点不一定都能实行，笔者只是一种抛砖引玉的想法，希望同行们共同思考这个问题。日本大学的汉语教育牵涉日本的大学教育制度问题，实不容易改变。目前只能依靠汉语教师的努力，尽一切努力把课上好。为了下一代的日中友好，汉语教师的责任重大。